



# 日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会  
E-mail:nichiro@nichiro.org  
Home Page http://www.nichiro.org  
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号  
Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



## 夏季ロシア語現地学習会開催

— 白樺の木に願いを託して —

太平洋国立大学での短期ロシア語研修に参加して

ロシアに興味を持って約1年。私は初めてロシアの地を訪れることができた。留学をしたこともなければ、寮などの共同生活の経験もなかった私にとって、今回のハバロフスクで実施された学習会は好条件であった。

現地に到着してすぐ寮に向かい、近くにあるスタローバヤ(食堂)にて夕食を取るようになった。並んでいる商品から自由に選択してレジにて会計をすることができるため、様々な本場の料理を体験することができる。ここで私は毎日違う料理に挑戦するように心がけた。本格的な留学の前に、その国の料理を食せば長く滞在できるか、相性の善し悪し分かるからである。どの料理も美味しかったが、現地で驚いたのはパンやポテトだけでなく、お米を食べる機会が多いことだ。海外に行くとお米が恋しくなるなどの話しをよく耳にするがロシアではそれがないように思えた。



特に印象に残ったのは会計での出来事だ。ある時、私はレジにて貰ったお釣りをうっかり床に落としてしまった。探したが全く見つからない。困っていたところ、係の人が同額の小額をレジから出して渡してくれた。この親切な出来事は私の心に強く刻み込まれた。このような心の優しさを私も大切にしたい。

語学授業は日本語訳や唄・映像などを用いた楽しめる内容で、観光プログラムにおいてもきめ細やかな気配りが見て取れた。地元の名所巡りを通して説明を受けながらロシア文化を体験することができ、夜の散歩も行われた。個人の留学では難しいことばかり。現地の人々との会話も楽しめたが、日本語が話せるスタッフの方が一緒に、日本の商品が売られているデパートにも案内してくれた。日本製との違いだけでなく、ロシアから見た日本を実感した。より良く変化し続けながらも、古き良き伝統を重んじる国の姿。この両面を同時に見ることができた。またロシアの方々から、日本のことを質問される機会も多々あり、日本人として知っておくべき事柄も教わったように思える。寮生活ではお互いに助け合いながら、キリル文字の家電に挑戦し、ロシア語に吹き替えられたハリウッド映画を見ながら、異なる年齢・立場の違う人たちと語り合うことができた。これもまた得難い経験だった。

ロシアでは白樺の木に触れながら願い事をするという。帰国する前に、私もその慣習に倣い心の中である言葉を囁いた。  
“またロシアにこられますように” (Y. M.)

8月6日(日)成田発のシベリア航空でハバロフスクへ。私にとっては初めてのロシアで多少緊張気味でしたが、日口交流協会の山田さんや千葉さん、服部さんが近くに居てくださったので常に安心していられました。迎いの車で約15分、宿泊先の大学の寮に到着。

翌朝9時から早速授業。入門レベルの文法的なものから、「百万本のバラ」や「モスクワ郊外の夕べ」などの懐かしいロシアの名曲、そしてハバロフスクやシベリア、モスクワなどを紹介する簡単なテキストを使った多彩な講義内容で、ロシア語にそれ程堪能でなくとも充分楽しめる授業でした。講義全体を通して全員少しでも多く「発話」するように配慮された進め方で、参加者各自のロシア語レベルにあまり左右されず、誰にとっても大変有効な、巧みな授業構成であったと思います。

授業後の午後と帰国前日の土曜日は市内観光と買い物。レーニン広場や数々のロシア正教寺院、博物館、アムール川遊覧船クルーズなどは勿論、「バルチカ」ビール工場見学や少し離れた郊外の「ロシアの農村」、そして見事な睡蓮の花で有名なガルキノ村など、一般のグループ・ツアーではまず訪れることは無いであろう、日口交流協会主催ならではの素晴らしい観光スポットを満喫しました。また、日本語が出来る現地の若い方々がボランティアとして参加して下さり、買い物やら通訳やら何かと助けて頂いて、授業とは別の素晴らしい交流が生まれたのも特筆すべき事でした。

食事は、私の場合ほとんど学生寮から徒歩5分の食堂(スタローバヤ)で頂きました。ボルシチやシー(スープ)、カツレツその他どれもこれも大変美味しく、また安いので驚きます。夕食後は隣のスーパーで水や翌朝の朝食用にパンやヨーグルトなどを仕入れてその日は終了です。

8月13日(日)。「機会があれば是非また参加して、今度はもっとロシア語で話したい！」などと思いながら名残惜しくも帰国の途に。2時間少々フライトで成田着。太平洋国立大学と日口交流協会そして参加メンバーの皆様のおかげで、素晴らしい思い出となる、残念ながらとても短い1週間となりました。感謝いたします。(松本泰男)

### 会員の皆様へ

●NPO日口交流協会では、会員の皆様へのサポートとして、ロシア各地への留学のお手伝いをしています。また、事務所では、経験豊かな先生方による様々なレベル別ロシア語教室も開催中です。会員の方々のために、安価で提供しております。教室は見学できますので、事務所までお問い合わせください。

Tel:03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております



## 手漉き和紙を作る体験会に参加して感じたこと

ユリア・クジノフ

和紙のことについていくつかのテキストを読みました。日本ならではの紙の特徴は洋紙と比べれば原料の植物繊維が細長く千年以上も長持ちするという事です。しかも、柔らかく温かい感じで、とても丈夫な紙なのだという印象を持ちました。残念ですが、和紙そのものにはこれまで自分で見たり触ったりしたことがありませんでした。職人によって作られた素晴らしい和紙を買うのは簡単ですが、自分の手で和紙を作ることなどあり得ない話で、これを自分で体験できることなど考えたこともありませんでした。自分の手で何かを創作することはとても魅力的で楽しさを感じます。日本の伝統工芸や文化に興味を持っている私を、手すき和紙作りに誘っていただき、非常にうれしく感じました。とうとう和紙に触れるだけではなく素敵な和紙を自分でも創れると思うと感動しました。朝から子供のように興奮と緊張で、一言も話せないような状況でした。手漉き和紙作りの工房の埼玉伝統工芸会館は閑静な場所にあつて、館内に入ったら色々な和紙作品の陳列に魅了され、伝統を受け継ぐ独特の地区の味みたいなものを感じ、しばし心の安らぎを覚えました。館内では和紙で作られた作品だけではなく、この地区で昔よく使われた歴史的な釣道具なども展示されていました。

しかし、一番印象に残ったことは和紙作りの師匠が手を取って漉き方を教えて下さったことです。漉き方は魔法の様に素晴らしいです。見ているだけでは簡単で、あまり複雑な



ことではないと思っていましたが、実はそうではなく、かなり難しいことを知らされました。だからこそ非常に感動しました。箕桁をもって、それを楮と水が入っている漉き舟の中で左右前後に三度もゆすっていくと少しずつ薄い紙が見えるようになります。それは魔法ではなくて何でしょうかという気持ちになります。その後、師匠は漉きあがった出来立

ての和紙を机に置いて、私たちが自分で漉いた白色の和紙に、用意された花や植物や装飾品を載せて各自思い思いの好きなデザインで作りあげて完成となります。これを乾燥させてから、後日埼玉伝統工芸会館より記念作品として各自に郵送されてきました。師匠のように綺麗な模様を作るのは難しいかも知れませんが、皆さんとても素敵な和紙を作られました。少し後で気付いたことですが、和紙を漉いているときには、それに集中して感じる余裕はありませんでしたが、心が大変癒されました。機会があればまた手漉き和紙作りにチャレンジする機会をもたせてもらいたいと思っています。

しかも、この日口交流協会による催しのおかげで多くの友達と楽しい時間を過ごして、色々な経験を持つ面白い人達と知り合う良い機会でもありました。また私の世界が広がりました。説明できないほど素敵な思い出の日でした。皆さんも機会がありましたら是非体験されることをお勧めします。

(モスクワ大学、法政大学法学部留学生)

## 第58回いたばし花火大会

日向寺 淳一



第58回いたばし花火大会は、8月5日(土)に荒川河川敷で開催され対岸の戸田橋花火大会と併せて50万人が鑑賞しました。

今年も東アジア友好ネットワークの主催、日口交流協会の後援で、ロシア大使館より大人と子ども含めて25人、日口交流協会から5人、併せて30人が参加し花火を鑑賞しました。いたばし花火大会は、大尺玉が数多く打ち上げられ、対岸の埼玉県戸田市とともにスケールの大きいことで知られ、都内全域から訪れます。午後7時、カウントダウンが始まり、両岸から一斉に打ち上げられると、大きな歓喜につつまれ、ロシアの方々からも「ハラショー」と声があがりました。猛暑が続き、この日も熱中症が心配されましたが、夕方には、少し涼しさを感じる花火大会日和となりました。今回も健康文化会医療労働組合のみなさんが、前日より場所の確保に尽力下さいました。とくにイワン・リバコフさん(モスクワの観光ガイド)が全面協力で、前日から最後の後片付けまで奮闘してくれました。(常任理事)

### ●第45回 懇話会のお知らせ

『ロシアにおける Cool Japan—ロシアの若者から見る日本』ロシアの若者を魅了するCool Japanとは?ロシアの若者文化に精通する西田裕希氏(電通)の講演です。

日時:10月28日(土)2:00~4:00(開場1:30)

会場:東京YWCA会館217室

交通:御茶ノ水駅より約5分

会費:学生1500円 学生会員1200円 会員2500円  
一般3000円

お申込み:会員/一般/学生の別・氏名・電話・E-mail等明記の上、E-mail・FAX・郵便等で協会事務局までお申し込みください。満員になり次第締め切りとさせていただきます。

Tel:03-5563-0626, nichiro@nichiro.org

懇話会スタッフ募集:川島まで

Tel:080-4325-9981, simatac@kzh.biglibe.ne.jp

### お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシアに関する講演会、在ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けております。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をよろしくお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

番場憲雅様、野崎守二様、坂本斐子様、朝妻幸雄様、内堀學様からご寄付がありました。ご協力有難うございます。振込先:郵便口座 00160-9-66486 加入者名:日口交流協会 連絡先:日口交流協会事務局 Tel:03-5563-0626



## 第10回懇親ロシア語合宿 in Sapporo

私は40代後半の東京のタクシー運転手です。2020年の東京オリンピックで上京または来日する国内外のお客様のおもてなしに関わる仕事ができればと、この仕事を志望致しました。大学時代、第2外国語でロシア語を学び、在学中の夏休みを利用してシベリア地方を訪れた経験があります。時折ご乗車されるロシア系や旧共産圏の国々のお客様と流暢に会話ができればとロシア語学習を再開致しました。そんな矢先、とある書店で今回の北海道合宿のチラシが目にとまりました。開催地が遠方のため考えましたが、札幌大学のロシア人教師や学生さんたち、同じ志の生徒さんたちと交流できるまたとない機会と思い申し込み致しました。

合宿初日、開所式の前にジダーノフ先生と娘さんのイリーナ先生がお声をかけて下さり、気さくな先生方だと分かって緊張が和らぎました。クラス分けで初級者にもかかわらず上級に振り分けられて動揺しましたが、授業では両先生が例を挙げて分かり易く解説して下さい、またロールプレイングの対話形式で楽しく学ぶことができました。

2日目のお昼、羊ヶ丘展望台に向向しセミナーハウスで学ぶ皆さんを前にして各生徒さんがロシア語ガイドの実演を致しました。日本語は平坦な物言いになりがちですが、ロシア語では感情込めて抑揚をつけた言い方が大切と改めて学びました。

初日のペリメニ作り後の夕食、その後のビンゴ大会、2日目ゲストを招いてのバーベキューで大いに盛り上がりました。食事の後、セミナーハウスのロビーで夜遅くまで大矢教授、学生さん、参加者の皆さんと膝を交えた本音の交流ができたこともかけがえのない経験です。来年も企画されましたらぜひ参加を希望いたします。このたびは合宿に参加させていただき誠にありがとうございました。(若松寿美男)

~~~~~

### ロシアの教会について

島田 顕

ロシアの教会について私のこれまでの経験をお話したい。まず日本でロシア正教の教会堂といえば東京の御茶ノ水駅近くにあるニコライ堂だが、実は私が住んでいる横浜市神奈川区にもロシア正教の教会堂がある。非常に小さく、本場モスクワだったら辻堂というくらいのもので、ここでロシア正教会は冷たいなという印象を持った。教会堂はカギが閉まっていたので、隣接の建物の呼び鈴を押し、中を見せてくれませんかとお願いののだが、結局怪しいものと思われ見せてくれなかった。土曜日の晩禱に来てくださいと断られてしまった。対応した聖職者とみられる人物はインターホン越しで姿を見せることはなかった。

モスクワで生活しているとロシア正教が身近なものであることを感じさせる。例えばタクシーに乗るとダッシュボードには聖人のイコンが飾られている。名前は生まれた日の聖人の名前をつけることが常で、自分の生れた日の聖人と職業の聖人を祀ることを後で知った。スポーツ選手とか勝利を呼び込みたい人は、「パペダーノーセツ」という聖人のイコンを祀るのだそうだ。「パペダー」は成功で、「ノーセツ」は運ぶ人なので、「勝利を運んでくる人」ということになる。

モスクワにはいろんなところにロシア正教の教会堂がある。別に正教徒ではないが、私は教会に行くのは好きだ。いやなことがあると、教会に行く。特別に祈禱をしてもらったりという



若松さんは、3日間の間ずっと明るく真面目に研修を受けていました。積極的に質問され、授業の合間には私の所に来てさっき私がしゃべった単語の意味を尋ねるなど、とにかく熱心な生徒さんでした。

若松さんを含め、東京から6名が参加しましたが、全員が全員とお喋りし合えるほど仲良くなりました。これは今までの合宿で初めての事でした。

2クラスに分けた授業のレベルが参加者に合うか心配でしたが、今回集まったのは中級かそれ以上の方がほとんどで、中級クラスでメインの講師を務めていただいたジダーノフ先生から、あなた方の理解が早いので教えていて疲れないと賞賛されるほどスムーズでした。一方、イリーナ先生の初級クラスにひとり入られた平方さんは、大勢の札大生に交じって頑張られました。修了証書の授与式では、平方さんはジダーノフ先生から真の女傑と称されていました。

親子の差ほど年が離れた学生達とは、最後の夜のバーベキューあたりからようやく打ち解けて話し始めましたが、そこで感じたのは、サブカルチャーなどロシアへの新しい接点がある(その方面では彼らは大変詳しい)という事と、自分なりの興味関心分野を持ちながら語学を勉強しているのは昔も今も変わらないという事でした。

札幌の夏はとても過ごしやすく、加えて大学の立派な施設を使わせて頂いたお陰で、快適に研修を受ける事ができ、良い思い出になりました。企画いただいた大矢先生はじめ札大の方々には厚くお礼申し上げます。(中村泰弘・常任理事)

ことではないが、祈りを捧げている人たちを見たり、教会の中の厳かな雰囲気に触れていると気分が晴れる、心が洗われる。まさに癒しの場所だった。長椅子に腰かけて暖をとることもあった。運が良ければ、聖歌隊の合唱を聴くこともできた。

モスクワと全ロシア総主教、アレクシー二世が健在だった頃、元旦の日に仕事の後に、ダニエロフ修道院の教会堂を訪れたことがあった。元旦のミサが執り行われていたのだが、とにかく長い儀式だったということだけが記憶に残っている。ロシア正教では、信者は祈禱の際は立ちっぱなしである。他のキリスト教とは異なるところである。最初はおとなしく列に並んでお祈りを聴いていたが、疲れて外に出てベンチでうとうととしてしまった。あとから聞いたら、儀式の最後に順番に聖職者の前に歩み出て、直接祈禱してもらおうことができたのだそうだ。

修道院の教会といえば、有名な「黄金の輪」の修道院の教会に行った時のこと。よせばいいのに教会の地下の井戸からくみ上げられた「聖水」(といっても「おしっこ」ではない)を口にしてしまったことがある。「パワースポット」とか、「霊験あらたか」なものにあこがれていたから、躊躇なく口ににしたのがいけなかった。飲んだ後に大変なことになった。「ゲリピー」だ。教会堂の中にはなぜか便所が見当たらない。急いでいたので、とりあえず教会の裏に出た。そこにはロシアの大平原が広がっていた。つまり、「大地がわが便所」となったわけだ。まさにいろんな意味でロシアの教会にお世話になったのである。

## 白夜マラソン

津田 憂子

「白夜マラソン」の存在をご存知でしょうか？これはロシアのサンクトペテルブルクで開催されているマラソン大会で、今年で28回目を迎えました。かく言う筆者は通算して5回参加しており、7月9日（日）に開催された今年の「白夜マラソン」大会でも無事に完走してきました。

「白夜」と聞くと、夜中に走るマラソン大会なのかと思いがちですが、スタートは朝です。去年までは朝9時のスタートでしたが、今年は交通規制の影響か、朝8時スタートと1時間繰り上がりました。スタート地点とゴール地点はエルミタージュ美術館の前にある宮殿広場です。大会当日はこの広場が人でごった返します。事前の登録時に10キロの部と42.195キロの部のいずれかを選ぶことができます。フルマラソンの方が若干先に出発し、少し遅れて10キロの部の参加者もスタートです。

筆者はいまだフルマラソンには挑戦できず、これまでずっと10キロの部で走ってきました。たった10キロを走るために、何時間も飛行機に乗って何千キロも移動するのは馬鹿げていると感じる方もいらっしゃるでしょうが、筆者にとってこのマラソン大会への参加は毎年のノルマになりつつあります。

では一体何がこのマラソン大会の魅力なのでしょう。最大の魅力は走りながら見る景色ではないかと思えます。ご存知のとおり、サンクトペテルブルクはピョートル大帝の時代

に荒れ果てた沼地の上に築かれた人工都市で、ラドガ湖から南西に流れ出したネヴァ川河口の三角州を中心に発達してきました。10キロのコースでは、このネヴァ川に架かる橋を3つ渡り、歴史的な建造物や建物の横を走っていくこととなります。その景色は圧巻です。川を見ながら、建物を見ながら、エルミタージュ美術館の傍を走り、最後は宮殿広場でゴールするというなんとも贅沢な経験をすることができます。

筆者が感じているもう一つの魅力、いや魅力というか、ロシアならではの面白さは、大会運営のルーズさでしょうか。日本のマラソン大会はとともきちんと交通規制がなされ、時間も正確です。これと反対なのが「白夜マラソン」です。今年のスタートは15分ほど遅れました。「早くスタートさせる！」と叫んだ人がいたくらいです。それでも、宮殿広場に仮設されたトイレの数があまりに少ないため、トイレに並んでいたためにスタート時間に間に合わない人がいました。また、たまにですが交通規制のタイミングがずれてしまうことがあり、車の中を走ることがあります。こんないい加減で大丈夫なのかと思わずこちらが心配してしまうほどですが、今年で無事28回目を迎え、海外からの参加者も増えています。このマラソン大会に参加するといつも、こうしたルーズさの上にロシアの社会や経済、政治は成り立っているのではないかと考えずにはられません。

(JST 研究開発戦略センター・フェロー)

## ウズベキスタン便り5

寺尾 千之

今年もNORIKO学級創設者・大崎重勝さんの13回忌にあたります。没後、丸12年を経た今もNORIKO学級が存続しているのは、大崎さんが遺した言葉「NORIKO学級は、お金のない子ども達が本を読み、勉強ができ、心の安らぐ場所である。決して子ども達からお金を集めてはいけない。NORIKO学級は、大きくしなくてもいい。綺麗に立派にしなくてもいい。有名にしなくてもいい。子ども達がいつでも集まれる楽しい場所にしてほしい」が、当時のサポーターの原動力になったからだと思えます。

実際、大崎先生に代わり赴任された多くのボランティア講師抜きには、学級の存続はあり得ませんでした。闘病中の大崎さんがNORIKO学級の行く末を案じ、発案したインターン制度が軌道に乗るきっかけとなったキーパーソンは、19歳の女子大生でした。2002年8月、当時は未知の国だったウズベキスタンに、彼女はたった一人で赴任したのです。その後、大崎さんが永眠されるまでの3年間に約50名のボランティア講師が赴任、現在まで、延べ数百名のボランティア講師がバトンを繋いでいます。

ここ数年はリピーターが多くなりました。インターネットの普及に伴い、数年前からガニシエル校長自身が、リアルタイムでフェイスブックにアップするNORIKO学級写真が、再訪の動機づけになっているのかもしれませんが。8月現在のフェイスブックには、中学2年生男子がNORIKO学級正門前に建立された大崎さんの墓前で合掌する写真や、生徒達を指導中の笑顔の小学校女性教諭の写真がアップされています。この中学生、実は、彼が誕生する前の学級創設時からの熱心なサ



ポーターであるお祖母さまの紹介で、去年、初めて渡航しました。高校受験を控えているにも関わらず、今夏も、大学生の従姉さんと一緒に赴任しました。お祖母さまからは「なにせ14歳ですから日本語の先生というよりもサッカー友達みたいな感じで、同じ年頃の子達と毎日大好きなサッカーに興じているようです。『庭のぶどうは好きなだけ食べてよい』といわれ有頂天に。『スイカもメッチャ甘い。お料理も全部好き。毎日たのしみ。』と大はしゃぎ。」との微笑ましい報告が届きました。小学校教諭の女性は2007年夏を皮切りに5回目の赴任となりました。彼女は、去年からNORIKO学級出身の一人の留学生を預かってもらっています。

大崎さんの言葉通り、小さなNORIKO学級だったからこそ現在まで存続できた、と今改めて思います。素晴らしい先見の明の持ち主だった大崎さんには、ご自身が遺した言葉によって個々の心の中でいずれ咲くだろう美しいボランティアの花が既に見えていたのかもしれないと、ふと思う今日この頃です。(リシタン・ジャパンセンター事務局長)

### お知らせ

#### ●第44回マトリョーシカ絵付け教室：9月3日（日）

時間：13：00～16：00

講師：菅野エレナ

場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」2階造形表現室  
会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）

\*従来のセットの他に、また新教材が入りました。

\*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局までお願いします。

Tel：03-5563-0626 E-Mail：nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております